

初めてのアメリカ視察

渡邊 敏雄

昭和37年1月、大阪市が計画した「海を渡るインテリア展」の会場設営や準備のため渡米。

この時期のシカゴは家具見本市で全米のバイヤーが集結。ファニチャーマート、マーチャングイズマートの広大な展示場に驚くが、そこにはロココ調、ルイ調の様式の様式家具ばかり。

その後、シカゴ、ニューヨーク、デトロイトなどの新しいビルを見学、モダンデザインに再び驚かされた。シカゴのインランドスチール社、ニューヨークのチェスマンハットン銀行、シーグラム社の役員フロアにはノル社、ハーマンミラー社、北欧の家具等モダンな家具がゆったりと配置され羨ましい限りであった。照明も、当時の日本の蛍光灯オンリーに対して白熱灯が多量に用いられ豊かな照明空間が展開されていた。

当時、海外渡航は政府によって制限され、渡航目的や会社での地位によってドルが割当てられ、私達は1日25ドル、渡航日数分しか入手できなかった。1日25ドルではホテル代、食事代を払うとギリギリで、ビール代はひそかに入手した闇ドル(1ドル400円位)でまかなう始末であった。ドルは固定相場で360円、今からみれば何とドルが高かったことか。

今や海外旅行は自由、費用は当時の数分の1で済み、若者でも

気楽に海外の文化に触れられる時代になった。若い人も大いに海外に出て見聞を広め自己充実をしてもらいたいと、切に願う昨今である。

これからのインテリア設計に求められるもの

今井 俊夫

現代、インテリア設計において「省エネ」の考え方は不可欠になっている。照明や住設機器など設備面での省エネは目覚ましい進歩を遂げた。また、窓サッシ・ガラスや床・壁・天井構成材なども断熱(省エネ)の視点抜きで推奨できない時代になっている。

平成25年省エネ基準が完全施行され、今後はもっとトータルな省エネ効果が要求される。この時流の中で、インテリア設計者は基本的な省エネ知識と実践力を身につけ、仕事に生かしていくことが求められる。

たとえば、住宅リフォームの場合、熱橋を見付け、断熱補強することで断熱効果を数値で示す。窓サッシ・ガラスの断熱仕様の違いで費用対効果をシミュレーションする。最新省エネ機器を導入した効果を、一次エネルギー消費量の違いで「見える化」する。それらをトータルでマネージメントする等々。

今までカンと経験で行っていたことが、これからはITの助けを借りて、デジタルで考える必要があるなあと、アナログ人間な私が思いました。

京都府インテリア設計士協会 KIS企画 秋の見学バスツアー 足助町と有松町 2015.11.8

恒例のバスツアー、今回の目的は愛知県の豊田市にある足助町と知多郡にある有松町の町並みの見学です。

バスの中での資料回覧や日向先生のレクチャーで予備知識も入れることができました。

足助町は、「豊田市足助伝統的建造物群保存地区」の名称で国の重要伝統的建造物群保存地区として選定されており、中部地方では足助町香嵐渓が紅葉の名所として有名だそうです。

足助は歴史的な交通の要所で尾張三河から信州を結ぶ伊那街道の重要な交通の中継地として栄えた商家町でした。主な交易物に塩がありましたが、ここに運ばれる塩には主に三河産の塩と播磨産をはじめとする西国塩とがあり、矢作川・巴川水運・伊那街道で入ってきました。そして各産地の塩を混ぜ合わせて品質を整え、運送に適するよう俵を改装する「塩ふみ」を行った上で、「足助塩」や「足助直(なおい)」の銘柄をもって伊那地方に運ばれ足助は「塩の町」と言われるようになりました。

最初に、三洲足助屋敷という山里の暮らしを紹介する施設で足助町の生活に密着した生業の見学と、少し紅葉には早めでしたが香嵐渓を観光、そしてお楽しみの昼食です。

昼食に舌鼓を打った後は足助町の街並み散策に向かいました。街道面は、間口の広さの関係で平入りと妻入り様式の混在する



街並みとなっており、家々は短冊状に仕切られた敷地の間口いっぱい主屋を建て、裏手では離れ座敷や土蔵を窮屈に配しており、そうした建家が街道沿いに隙間なく連なって重厚な景観を作り出しています。



1775年の大火で街並みの大半が消失、再興された街並みは漆喰塗り込め2階建て、やや急勾配瓦葺の町家で防火を意識した家が普及しました。一部、鋸簀葺(しころぶき)の軒高が低い主屋が残っていますが、大火を免れた建物形式を伝えているそうです。

重要文化財で調査復元中の旧鈴木家住宅も見学させてもらうことができました。

そこは約4,000㎡の敷地がある商家で、拡張と増築で現在の屋敷が構成されており、年々増築されていく建物は繁栄していく家業に比例し凝った作りが施されるようになりました。

工業者の方々からも説明を聞きながらの見学だったのと、絵図面が残されていたので間取りなども詳しく知ることができました。



次に向かった有松町は、尾張藩が1608年に東海道の桶狭間と鳴海の間に新たな村を作るため移住を呼びかけて出来た村で、農作地が少なかったため新たな産業として興した有松鳴海絞りを、街道を行く旅人に売ったことから絞りの町として発展させ村が繁栄したそうです。

1784年に村が全焼し現在の古い街並みはこの火災以降の建物ですが、それを機に茅葺から瓦葺きに改め防火壁の卯建を設け塗籠りにし、中2階建てで1階前面には半間の土庇と格子があり2階の窓は虫籠窓になっています。

現在も格子の美しい商家や白壁の土蔵など、江戸時代そのままの姿を残す町屋が10棟余り残っており、緩やかに曲がった街道沿いに屋根や庇が前面で揃い、これらの均質な意匠の家屋が立ち並ぶ街並みは都市景観重要建物等に指定されています。

久しぶりに参加したバスツアーでしたが、KISの方々との交流もでき、非常に内容の濃い一日となりました。

(記・五代 晋一)



OIS

大阪府インテリア設計士協会

〒541-0059 大阪市中央区博労町1-6-14
TEL. 06-6262-1488 FAX. 06-6262-1553

URL <http://jp-interior.or.jp/ois>
blog <http://oisblog.exblog.jp>
E-mail ois@jp-interior.or.jp

発行人：河野
編集人：田原(第3事業部長)
スタッフ：瀬部・石渡・山田
朝日・加茂・今井
五代(第1事業部長)
事務局：岡崎・奥田



2016の新年と葉知利書100号に思う

会長 河野 洋二

「葉知利書」100号を輝ける年明けにお届けします。OISの数々のイベントを綴ってきた葉知利書がついに100号です。勉強会、見学会、親睦関係など定期的な催し、会員諸賢の仕事ぶり、旅行記など様々な記録を各紙面に残してきました。まさに「継続は力なり」です。当協会の歴史、協会諸先輩方の活躍もバックナンバー各号に保存されています。若い会員の皆さんも、ぜひ事務局へ立ち寄ってご覧になってください。OISはこれからも魅力あるイベントを企画・実行し、皆さま方の

交流・スキルアップに役立てるよう、また、催しに参加できなかった皆さま方にはこの葉知利書を通じて報告致します。最後に、歴代の編集に携わってこられた方々に深く感謝申し上げますとともに、この記念すべき号の発行に関わる機会をいただき感謝します。

※葉知利書のバックナンバーはOISのホームページで読むこともできます。
http://www.jp-interior.or.jp/ois/katudou/04_kouho.html

2016 初詣と新年会



1月10日(日)、恒例の初詣が「お初天神(露天神社)」で行われました。

お初天神は縁結びのパワースポットとして、近年、若者に人気があるそうですが、ここで初めて初詣を行った6年前と比べると、あきらかに参拝者が多くなっているのがわかります。

拝殿でOISの発展と会員皆様の活躍と健康を祈るお祓いを受け、河野会長が代表して玉串奉奠、全員で拝礼・祈願、お神酒をいただきました。今年は境内で骨董市が開かれていたため、記念写真は少し場所を変えての撮影となりました。

その後、場所を「がんこ曾根崎本店」に移しての懇親会。会場が狭く身動きがとれない状態で、新年早々、参加いただ

いた皆様にはいろいろと不便をかけたしまいました。

話は戻して・・・懇親会では中の句と下の句を別々の用紙に自由に書いてもらいシャッフルして取り、上の句を干支(例：さるとしは～)で読み上げる「おもしろ川柳」と、「生年月日でわかる2016あなたの運勢ゲーム」で楽しみました。

最後に、新年にちなんで、今年の抱負などを全員に話してもらいましたが、各人各様、それぞれの夢に励まされ、身の引き締まる思いで2016年のスタートを切りました。

(記・事務局)





忘年会報告
アイソバル Massa

2015. 12. 4
今回の会場は「スペインバルMassa」でした。とてもお洒落な空間で、天井の意匠も好みでよかったです。



日本語が通じないスタッフもいて、本場に行ったかのような時間でした。さすがOISの一年を締めくくるイベントの会場でした。料理がですね！ほんとと美味しく、来られなかった方を思うと気の毒でなりません！ほんと！

2015年は、OISの催事にあまり参加できなかった一年でしたが、最後の最後に参加でき久しぶりにお会いできた方や、初めての方ともたくさん話せ、とても楽しい時間、忘れられない良い忘年会になりました。

毎回思うのですが、たくさんの経験をさせてくれた大先輩と身近に接してもらえるOISには感謝感謝です。皆様、2016年も良き一年になりますよう、お祈りいたしております。(記・桑山 優樹)

帰ってきた“TALK PAL” - ① 2015. 10. 19

何年ぶりでしょうか…懐かしい雰囲気の中で“トークパル”が再開されました。以前の時は私もまだ若かったので、大先輩の方々に仕事や、人のかかわり方や、いろんな場面で自分を生かす表現の仕方など沢山教わりました。そのお陰でお客様に喜んでいただける提案や、現場管理ができるようになっていました。



新しいトークパルは、もちろん集まって時間を共有することが目的ですが、テーマを決めてそれに向かって、それぞれの考え方や意見を話すところから始まりました。

第1回目は、神社建築についての話で、様々な様式・名称の説明資料が準備されており、守護獣として置かれた“狛犬”の起源や、出雲大社の図面に基づいて、社・拝殿・本殿等の配置も学ぶことができました。

トークパルは2か月に1回、偶数月の19日(曜日により変更も)に行います。1,000円程度のフード、またはドリンクの持ち寄り、最初の30分ほどはテーマに沿ったお話ですが、後はフリートーク、楽しい「雑談」が飛び交います。お気軽にご参加ください。(記・南野 江以子)

帰ってきた“TALK PAL” - ② 2015. 12. 19

2回目のテーマは「食」、中でも今話題の「マクロビオティック」について、まず田原さんからレクチャーがあり、「穀物や野菜、海藻などを中心とする日本の伝統食をベースとした食事を摂ることにより、自然と調和を取りながら健康な暮らしを実現する考えであることを知りました。

砂糖やチョコレートを使用していない「マイクロビスイーツ」

篆刻教室に参加して 2015. 12. 14

恒例、随想(宮後)先生の篆刻講座。私は3回目の受講となりました。毎回受講の方をはじめ、初参加の方も交えてのぎやかな時間でした。年に1回ですが、昨年より石を彫る感覚に慣れたように思いました。



筆者の作品

それでもまだまだ、彫り落とさないようにとこわごわですが、宮後先生は大胆にザクザクと彫り進められその手許は見飽きません。私が彫ると線がギザギザで意味不明ですが、宮後先生の手にかかると思えるような印になる瞬間は、毎回ドキドキしてしまいます。

今回の講座で発見したことをお話ししましょう。宮後先生に篆刻を始められたきっかけをお伺いしましたら、50歳になり本格的な印が欲しいと思われたことだそうです。篆刻を始められて早やウン十年?日展に入選される腕前となられたのは、ご存じのとおりです。宮後先生にぴったりの趣味(趣味の域を超えています)との出会いが50歳だったとは。

このところの私は、体力と気力のなさにぐったり気味だったのですが、宮後先生のお話から、50歳に始めたことでも楽しい大きな花を咲かせられることが発見できました。色々の諸事に振り回される毎日に、新しいことには躊躇しがちでしたが、違っていましたね。

50代、60代とまだまだ未知の世界ではありますが、心はいつもきらりと光る瞬間をキャッチしたいものです。ありがとうございます!

幅広い年代の方々の出会いがあるOISって魅力的ですね。2016年もまた、新しい出会いが沢山あることでしょう。

皆さん、今年は何にチャレンジされるか、またお聞かせください。(記・今井 和子)

のクッキーやチョコ菓子を試食しましたが、とてもそのようには思えない食感、味で、これが身体に良いのなら、それに越したことはないと思感しました。

続くフリートーク時間には、参加者めいめいが持ち寄り、事務局のミニキッチンでフル活用した食べ物が揃い、飲料はビール、日本酒、ワイン、焼酎、ウヰスキーなど、ちやちや居酒屋顔負けのドリンクメニュー、心いくまで会話と食事を楽しんで、10時半ごろのお開きとなりました。

改めて“TALK PAL”のいわれですが、TALKはトーク=19、PALはご存知のと通りの意味の組み合わせで、19日の開催となっています。次回は「乗り鉄」の話かも…。(記・事務局)



銀閣寺と大文字山登山 2015. 11. 3

室町幕府第8代将軍の足利義正により造営された銀閣寺こと慈照寺。「キンカクギンカク」とあまりにも有名で、世界遺産に登録されています。

市バスの銀閣寺前で下車し、人並みに従って歩くと哲学の道が現れます。西田幾太郎は歩きながら思索にふけったんだそうですが、この人込みでは、まずはぶつからないように気をつけないと。

両側にはお店がずらぁ〜と軒を並べ、ガイドブックに出ているお店には長蛇の列ができています。やっとこさ銀閣寺総門に着き拝観です。中庭を抜けると、みんなが銀閣を背景に記念撮影を行うので、人だかり。だらだら歩きの人に「早く進めよ」なんて小声で言ってる人もいて…。

銀閣寺の売りはひなびた心休まる美しさ。金閣寺のような華やかさはありませんが、日本人の持つ「わび・さび」の世界観を感じさせる寺院です。日本語の「侘しさ」「寂しさ」は観念的で美的な概念ですが、人がいなくて、静かな状態をささすそうです。京都観光ブームの今、本来の落ち着いた趣を望むのは、無理なんではないでしょうか。

当日の第2部は、大文字山登山です。銀閣寺の裏に登山口があり登山開始ですが、ここからも人だらけ。山のマナーに「途中で人に出会ったら挨拶する」というのがあります。絶え間なく人が連なっているようなコースでも「コンニチワ」「こんにちは」。必要でしょうか?

登る前や登り終わった後に駐車場やその付近で会っても挨拶することもなく見向きもしないのに、登山の途中では、会う人、会う人に親しげに挨拶して面白い現象です。

そもそもマナー「礼儀作法」とは規則というほど厳しいものではないが、社会的に望ましいとされる約束事に沿った言動や態度のことです。

「エチケットとの違いはなんだろう?」とか考えながら歩いていると山頂です。

京都の市街地が一望の素晴らしい景色です。

下山後は「名代おめん」で遅めの美味しい楽しい昼食。しんどがった人もみんなニコニコ、いい顔です。

「ごちそう様。お疲れ様でした!」(記・吉矢 祥子)



アサヒビール大山崎美術館 & サントリー山崎蒸溜所見学記

平成27年10月10日9時30分、阪急大山崎駅前に参加会員全員集合。

アサヒビール大山崎山荘美術館提供の送迎バスに乗車同美術館に向かう。

山道を登り15分ほどで美術館正門に到着。大山崎山荘は大正から昭和の初期にかけて実業家・加賀庄太郎氏が別荘として自ら設計した英国風の山荘。その後加賀家の手から離れ、アサヒビール株式会社が大山崎町と協力して復元整備を行い、1996年「アサヒビール大山崎山荘美術館」として生まれ変わった。



2階建て本館には展示室5室をかかえ、さらに安藤忠雄氏設計の地中館「地中の宝宝箱」、山手館「夢の箱」展示館がある。展示室では英国陶芸作家「ルーシー・リーとハンス・コパーのかたちのであい」展が開かれており、バーナード・リーチや濱田庄司とのエピソードなどを併せて興味深く作品の紹介が展開されている。本館2階の喫茶室を素通りしてテラスから庭園を見下ろす眺望が素晴らしい。

約1時間、一行は早や次の目的地へ心が

移動しつつあり、予定より早く美術館を退出。下り坂の山道を足早に駆け下りる。

まもなく「サントリーウイスキー山崎蒸溜所」に到着。

創業者鳥井信次郎氏が日本初のモルトウイスキー蒸溜所の建設に着手したのは1923年。ここ山崎の地はウイスキー作りに適した良質な地下水(山崎の名水)と、ウイスキーの熟成に欠かせない湿潤な気候の条件を見事に備えて期待にこたえていた。

見学は1時間。スタート時間より早い到着のため、「山崎ウイスキー館」などで時間を過ごす。「ウイスキー・ライブラリー」に多彩な原酒やウイスキー数千本が並び壁面のディスプレイは圧巻。「日本のウイスキーの歩み」展示では鳥井信次郎氏が愛用した機、日本初の国産ウイスキー“白札”ボトルなどが日本のウイスキーの歩みを物語る。「テイastingカウンター」では約100種類のウイスキーが勢ぞろい、シングルモルトウイスキーの飲み比べ(有料)など楽しむ人が行列をつくり、我が一行にも早や行列の仲間入りが見える。

定刻が来て見学の群れに入る。ウイスキーが出来るまでの丁寧な説明を聞きながら蒸溜室に入る。カタチの違う巨大な蒸溜釜(ポットスチル)に圧倒される。蒸溜釜の使い分けによって様々な味わいの原酒が生まれる由。ほのかに原酒の香りが漂っている。蒸溜された原酒は樽に詰



められ長い眠りに就き熟成の時を待つ。オーク材、カタチ、サイズの異なる樽が並んだ広大な貯蔵庫を歩く。日本ならではの北海道産ミズナラの樽もあり、長期貯蔵することにより日本独特の熟成香を原酒にもたらすという。1920年代最古の樽も今だ健在。その容姿に感動する。

見学のラストは待望の試飲会場へ。“山崎”のハイボールは1杯だけ。“角”の水割りは飲み放題。しかし残り時間に制限あり(15分)それぞれ1杯ずつでお開き。未練を残して見学終了。

短い時間ではありましたが、大山崎の自然とモノづくりの人間の力を体感した見学会でした。(記・山崎 晶)

